

令和 5 年 5 月 15 日現在

機関番号：37130

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12481

研究課題名(和文)精神科訪問看護師の認知行動療法実践を促進するスーパーバイズの効果に関する研究

研究課題名(英文) A study on the effect of supervision to promote cognitive-behavioral therapy practice of home visit psychiatric nurses

研究代表者

白石 裕子 (Shiraishi, Yuko)

福岡国際医療福祉大学・看護学部・教授

研究者番号：50321253

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、地域における精神障害者のセルフマネジメント能力を高める精神科訪問看護師の認知行動療法(以下CBT)を用いたケアを促進するために、訪問看護師へのCBTのスーパーバイズ(以下SV)を実施し、その効果を検証することである。

研究方法：6か所の訪問看護師を対象にSV介入群11名と通常ケア群10名に分け、SVの効果を地域に暮らす精神障害者の症状の変化を検証することで明らかにした。

結果：SV群は通常ケア群に比べて、EQ-5D-5Lの数値が有意に高く、GAD-7の数値が有意に低下し、QOLの向上と不安の軽減に有効であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、精神障害者の地域包括ケアを促進する人材としての精神科訪問看護師に焦点を当て、地域に暮らす精神障害者のQOLの向上と症状のセルフマネジメントを促進するためのスキルとしての認知行動療法(CBT)の焦点を当てた。

精神科訪問看護師は地域に暮らす精神障害者に対してCBTの実践を行いたいという希望があるが、実践に際してCBTをどのように実践したらよいか戸惑う看護師も多かった。そのための方策として実践をサポートするスーパーバイズに着目し、その効果を介入群と通常ケア群で比較した研究でその効果が実証できたと考える。

研究成果の概要(英文)：Aim: With the recent promotion of psychiatric care in the community, cognitive behavioral therapy (CBT) has attracted attention as a psychosocial interaction that promotes the self-management and recovery of persons with psychiatric disorders living in the community. Although it is recommended that practitioners receive supervision to practice effective CBT, nurses to practice CBT are limited. This study examines the effectiveness of supervision of CBT practiced by visiting psychiatric nurses.

Methods: Nurses provided 16 sessions of CBT to home-visit nursing users at 6 home-visit nursing stations. The nurses in the control group provided CBT while conducting self-study using educational materials on CBT. In contrast, nurses at the home nursing station in the intervention group provided CBT while receiving 30-40 min of personal supervision once every week. To examine the effectiveness of the supervision, the participants' quality of life, depressive symptoms, and anxiety symptoms.

研究分野：精神看護学

キーワード：精神科訪問看護師 認知行動療法 スーパーバイズ

1. 研究開始当初の背景

近年、精神医療の地域移行が推進される中、地域に暮らす精神障害者のセルフマネジメントやリカバリーを促進する介入として**認知行動療法 (Cognitive Behavioral Therapy: 以下 CBT)** が注目されている。看護師による CBT の実践報告は散見されるが、訪問看護を基盤とした CBT の看護実践報告はまだない。本研究の成果により、今後地域で暮らす精神障害者の再入院の予防、入院期間の短縮、QOL の向上が期待できる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、CBT を基盤とした精神科訪問看護師のための研修プログラムの開発・実施・評価後の事例スーパーバイズ (以下 SV) による精神科訪問看護師のケアの質の変化及び精神障害者への介入効果を検証することである。

3. 研究の方法

1) 研究手順

- (1) 対象者への介入研究に先立ち、CBT 教材として「精神科訪問看護師のための認知行動療法」の DVD を作成する。
- (2) 九州圏内の精神科に特化した訪問看護ステーションを研究対象としてリクルートし、DVD 視聴後、非ランダム化で CBT 実践及びスーパーバイズ群 (SV 介入群) と TAU (Treatment as usual: 通常のケア) 群に分類し、CBT 実践をサポートするための事例を用いた SV を実施する。1クールを2週に1回×4回の2か月とし、15クール行う。スーパーバイズは精神看護学の研究者であり、CBT 実践5年以上の研究代表者と研究分担者が実施する。
- (3) SV 介入群 TAU 群の精神科訪問看護師と対象利用者のケア効果について3)の評価項目をもとに検証を行う。

2) 研究デザイン

国際医療福祉大学主管・他施設共同非ランダム化比較試験

3) 評価の項目

(1) 主要評価項目 / 主要エンドポイント / 主要アウトカム

- 精神科訪問看護師: Cognitive Therapy Awareness Scale Japanese: CTAS-J 認知行動療法尺度)
- 対象利用者: GAF (Global Assessment of Functioning 機能の全体的評定)

(2) 副次的評価項目 / 副次エンドポイント / 副次アウトカム

- 精神科訪問看護師: 看護師の専門職的自律性尺度、自己効力感尺度
- 対象利用者: PHQ-9 (Patient Health Questionnaire-9)
EQ-5D (EuroQoL5-dimensions)

4) 統計解析方法

量的データについては、SPSS 22.0 J を用い、各尺度について繰り返しのある二元配置分散分析、重回帰分析などを実施し比較検討を行う。途中、脱落者などがあっても分析に含める手法 (intention to treat analysis) を用いる。

4. 研究成果

本研究の被験者として最終的に14名(女性8名、男性6名)の精神科訪問看護師がCBTのスーパーバイズを受けた。被験者の平均年齢は43.3 (range, 28 - 53) 歳、看護経験は平均16.5 (range, 7 - 24) 年、精神科訪問看護歴は平均6.8 (range, 2 - 16) 年であった。

CBTの研修を受けた経験は平均1.6 (range, 1 - 7) 年であった。スーパーバイズは博士号を有し、CBTのトレーニングを10年以上受けた2名で、個別の対面で構造化された認知行動療法センターのプロトコルに基づいて30~40分提供された。

研究の主要アウトカムである対象利用者のGAF得点は、SV群はTUN群と比較して、SV前に比べSV後は優位に改善していた。また、副次アウトカムであるEQ-5D得点は、SV群はTUN

群と比較して、SV前に比べSV後は優位に改善していたが、PHQ-9では有意な差は見られなかった。

精神科訪問看護師の主要アウトカムであるCTAS-Jは、介入前後では、SV介入群の看護師は26.3から33.2点に得点に変化し、TAU群の看護師は25.8から31.1に変化していた。両群とも介入前後の得点は有意に高くなっていったが、両群間での有意差は見られなかった。

以上の結果から、本研究より以下のことが示唆された。

精神科訪問看護師のCBTのスーパーバイズは対象利用者のQOLを高め不安を軽減する効果があること。

CBTを受けた対象利用者は、半数以上に症状の悪化やドロップアウトがみられなかったため、地域に暮らす精神障害者の再入院化のリスクが少なくなったこと。

しかしSV群、TAU群で抑うつや不安が改善されなかったことについては、対象となる利用者のベースラインがもともと高かったため（PHQ-9:9.90-10.33，GAD-7:8.10-9.56）改善の余地が少なかったことが考えられる。

今回の研究成果の指標以上に、CBTのスーパービジョンによる対象者の安心感を高めることで、治療の成果だけでなく、ドロップアウトを防ぐことも示唆された。

それゆえ、精神科訪問看護師がCBTを提供しスーパーバイズを受けることは地域における精神障害者の地域生活におけるQOLを維持し、再入院を予防する一助になると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Yoshihiro Saito, Yuko Shiraishi	4. 巻 -
2. 論文標題 Feasibility study of telephone-based cognitive behavioral therapy program for depression in family caregiver attending to people with dementia at home	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Psychosocial Nursing and Mental Health Services	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Yuko Shiraishi, Hiroki Tanoue, Hiroko Kunikata, Yoshihiro Saito
2. 発表標題 Examination of the effects of cognitive-behavioral therapy supervision toward psychiatric visiting nurses
3. 学会等名 9th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田上博喜、白石裕子、泉武康、石橋昭子、上田智之
2. 発表標題 精神科訪問看護師の認知行動療法を基盤とした研修プログラムの開発と評価(第1報)
3. 学会等名 日本精神保健看護学会第27回学術集会・総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 上田博之、石橋昭子、田上博喜、泉武康、白石裕子
2. 発表標題 精神科訪問看護師の認知行動療法を基盤とした研修プログラムの開発と評価(第2報)
3. 学会等名 日本精神保健看護学会第27回学術集会・総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yuko Shiraishi, Hiroki Tanoue, Tomoyuki Ueda, Akiko Ishibashi
2. 発表標題 Effectiveness of a cognitive behavioral therapy workshop for home-visit psychiatric nurses
3. 学会等名 21st World Federation of Mental Health World Congress (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石橋昭子、白石祐樹、上田智之、田上博喜、斎藤嘉宏
2. 発表標題 精神科訪問看護師の認知行動療法を基盤とした研修プログラムの修正と再評価(第1報)
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 上田智之、白石裕子、石橋昭子、田上博喜、斎藤嘉宏
2. 発表標題 精神科訪問看護師の認知行動療法を基盤とした研修プログラムの修正と再評価(第2報)
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 白石裕子監訳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 看護の科学社	5. 総ページ数 163
3. 書名 ストレングスにもとづく看護ケア 理論編	

1. 著者名 白石裕子監訳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 看護の科学社	5. 総ページ数 228
3. 書名 ストレングスにもとづく看護ケア テクニック編	

1. 著者名 白石裕子監訳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 看護の科学社	5. 総ページ数 113
3. 書名 ストレングスにもとづく看護ケア 実践編	

1. 著者名 斎藤嘉宏、吉永尚紀、白石裕子、石川博康、長浜美智子、田上博喜	4. 発行年 2019年
2. 出版社 看護の科学社	5. 総ページ数 181
3. 書名 認知行動療法を用いた精神看護実習ガイド	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田上 博喜 (Tanoue Hiroki) (00729246)	宮崎大学・医学部・助教 (17601)	
研究分担者	國方 弘子 (Kunikata Hiroko) (60336906)	香川県立保健医療大学・保健医療学部・教授 (26201)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	齋藤 嘉宏 (Yoshihiro Saito) (90807413)	国際医療福祉大学・看護学部・助手 (32206)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関